

東北学院大学 災害ボランティアステーション



TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY Disaster Volunteer Station

東北学院大学災害ボランティアステーション

所長

郭 基煥 (東北学院大学経済学部共生社会経済学科教授)



他人のために何かをするときに得られる「喜び」は何物にも替えられないものです。ボランティアをすることで学生がこの「喜び」を実感してくれることを望んでいます。



ネパール震災募金活動



セキ浜足湯ボランティア活動

STAFF MEMBERS MESSAGE

東北学院大学災害ボランティアステーション

学生代表

本間 一輝 (東北学院大学 経済学部共生社会経済学科3年)



震災から5年が経ち、目に見える復興が徐々に感じられるようになりました。しかし、仮設住宅・復興公営住宅で孤立していく高齢者や依然として経営が厳しい水産業、遊び場を失った子どもたちなど、行政の行き届かない目に見えない復興があります。何気なく毎日を過ごす私たちの近くに不安な思いをしている人たちがいます。「若い力」が今もなお、被災地域に必要です。東北学院大学は震災ボランティアの拠点大学で、学生を主体に、多様な活動を行っています。「大学で何かやってみたい、人の為に何かしてみたい!」と思っている皆さん、ボランティアには多様な可能性があります。一緒にボランティアを通して人とのつながりを学び、東北を盛り上げませんか?

登録方法

検索サイトで

東北学院大学災害ボランティアステーション

検索

定期的にメールマガジンも配信しておりますので、是非登録をお願いします。

復興大学災害ボランティアステーション

検索

●お問い合わせ先

東北学院大学災害ボランティアステーション

TEL : 022-264-6521 (受付対応時間/平日 11:00 ~ 16:30)

E-mail : tgvolu@staff.tohoku-gakuin.ac.jp



土樋キャンパス



〒980-8511 仙台市青葉区土樋1丁目3-17号館2階 725教室
(東北学院大学地域共生推進機構、復興大学災害ボランティアステーションとオフィスを兼用)

泉キャンパス



〒981-3193 仙台市泉区天神沢二丁目1-1 コミュニティセンター内
(東北学院大学生活協同組合隣に設置)

東北学院大学 災害ボランティアステーションとは



平成27年9月20日山元町農地復興活動



平成27年9月27日セキ浜町仮設住宅活動



平成27年10月25日仙台市泉区豪雨災害ボランティア活動



平成28年2月7日杜鹿地域交流スタディツアー

東北学院大学災害ボランティアステーション(以下、「ステーション」)は、地域情報を集約・共有し、支援を必要とする人に同大学学生・教職員が直接支援するとともに、市町村災害ボランティアセンターや全国の大学と連携し、被災地支援のための広範な活動を中継・展開しています。また、ステーションの活動は地域貢献とともに、学生にボランティアという新しい学び・成長の場をセッティングしています。

東日本大震災後の2011年3月29日に慌ただしくステーションを立ち上げ、当初は、仙台市社会福祉協議会が中心となって設立した災害ボランティアセンターに協力し、学生を中継してつなぐことを目指し活動を開始しました。しかし、その後、次々と被災地から支援の申し出が続き、ステーションとしての独自の活動も展開することとなりました。

当初から、被災地域に対し、大学としてどういう支援ができるかを、学生と教職員と一緒に試行錯誤して参りました。被災地の汚泥除去、屋外清掃などに始まり、混乱した交通状況の整理、避難所への後方支援、支援要請のマッチング業務など、多様なニーズに対応いたしました。

設立から約5年が経過しようとしている現在、活動内容が多種多様化し、様々な組織との連携体制を持っており、ステーションの役割・機能も広範囲に及んでいます。

主な役割・機能

設立当初から、社会福祉協議会ボランティアセンターの大きな機能であるボランティアマッチングをベースとして活動を行う中間組織・後方支援組織としての役割を担う活動をしていました。主に大学生へボランティア募集の情報発信、活動のマッチングなど、大学のボランティアセンターとしての役割を果たしていくのですが、この機能をベースとして組織の運営を行っていくことにより、様々な独自の役割・機能を果たすことになりました。

1 ボランティアマッチング

ボランティア募集情報を集めて、大学生に紹介し、ボランティア活動につないでいます。

2 情報発信

ホームページ・SNSなどを通して、様々な復興の情報を発信しています。

3 中継機能

支援できる人と支援を受けたい人をつないでいます。

4 日本全国の大学生の復興の輪を広げる
「大学間連携災害ボランティアネットワーク」

東北学院大学もまた被災校であり、日本全国の大学から支援をいただきました。一つの大学では対応が無理な問題も、大学間が互いの個性を尊重し合い、できる支援を集約したとき、大きな力となりうるのではないかと考えて、このネットワークを立ち上げ、活動を行っています。

5 宮城県の大学が手をとりあう
「復興大学災害ボランティアステーション」

東北学院大学は、宮城県の大学生が積極的に関われるボランティアネットワーク代表大学でもあります。復興へ関わる気き・きっかけの場として、様々な機会をセッティングしています。



平成27年8月
夏ボラプロジェクト雄勝町



平成28年2月9日
山形県豪雪除雪ボランティア活動

いくつかの活動取組紹介

REPO 1
七ヶ浜町
災害復興公営住宅支援活動

ステーションでは2011年から宮城県七ヶ浜町で足湯ボランティアを中心に活動を行ってきました。現在は被災を受けたほとんどの方が仮設住宅から公営住宅へ移っている状況です。住民の方の依頼もあり、2015年12月から葛蒲田災害公営住宅の集会所で月に1回のペースで交流会をおこなっています。交流会では住民の方と学生が企画したレクリエーション行うやお茶を飲みながらお話をしています。交流会は住民の方が外に出るきっかけと住民の方同士が集まれる場を作ることを目的に行っています。



ステーションとして初めての災害公営住宅での活動となりますが、これからも住民の方とのつながりを大切に、一方的なボランティア活動を行うのではなく住民の方と協力して活動を行っていきます。

REPO 2
夏季集中ボランティア活動
「夏ボラ」

私たちは定期的に行っている活動のほかに、夏休みに「夏ボラ」という宿泊型の合宿も兼ねたボランティア活動にも参加をしました。気仙沼や石巻、また陸前高田市にも行き、景観復活作業や、遺留品捜索など様々な作業を通し、振り返りを行って自分の経験にしていくということをしてきました。普段の活動とは違った活動を通して、自分が現地でボランティアをする重要性など、各々が多くの事を学びました。またたくさんのお大学の方と交流し、良い刺激をもらいました。



M E S S A G E

ボランティア活動を通して見えてきたもの

- 東北学院大学災害ボランティアステーション
- 学生スタッフからのメッセージ



手塚 亮 (東北学院大学経済学部共生社会経済学科4年)

私は、人のため誰かのためになりたいという思いから、災害ボランティアステーションに入りました。恥ずかしながら当初は、東日本大震災が起きてからの被災地の現状を知らず、自分になにができるか、復興のためになにができるかといったことを深く考えたことがありませんでした。しかし、被災地に足を運び、現状を知り、現地の人の声を聞き、活動を通して自分で自分になにができるか、復興のためになにができるかといったことを考え活動するようになりました。そこで気がついたのは、震災から年月が経ちボランティアのニーズも多様化してきているということです。「若い力」が必要とされているいま、私たち学生にできること、学生だからこそできることがたくさんあるのではないかと感じます。

私は多くの学生にボランティアを行ってほしいと考えています。私自身ボランティアを始めたことで、数多くの人と出会い、様々な経験をしてとても大きく成長することができました。ボランティアを始めていなければ、いまの自分はないと思います。人々の力になりたい、自分自身を成長させたい、大学生活を充実させたい、理由は人それぞれでいいと思います。きっかけは様々であれ、一歩踏み出すということが大切です。ぜひ、私たちと一緒に災害ボランティアステーションで活動してみませんか？あなたの中で必ずなにかが変わると思います。



- 東北学院大学災害ボランティアステーションに関わった
- 東北学院大学OB・OGからのメッセージ



嘉藤 梨奈 (団体職員)

私が災害ボランティアステーション（以下ボラステ）で活動を始めたのは、震災後間もない3月下旬でした。ボラステなら自分にもできる活動があるだろうと思って足を運んだところ、案の定参加できる活動がありました。しかも「運休していた電車の代わりに多賀城まで運行していたバスの乗り場で乗客を誘導する」という予想外の活動が！地震や津波の被害を直接受けた場所での活動だけが震災ボランティアではないのだ、と初めて知った瞬間でした。

その後は他団体に所属したり、運営側に興味を持ってボラステの学生スタッフに参加したりと活動の幅を広げていきました。その中でボランティアを希望する他大学の学生と出会ったことと、被災者の方々と直にお話できたことは貴重な経験でした。他大学の学生からは全国にはボランティアを希望する学生がたくさんいることを教わり、また被災者の方々からはこちらが思いつかなかったようなボランティアのニーズをいただきました。どちらも、マスコミの報道だけでは見えてこなかった面であり、直接人と会って話すことの大切さを学びました。

そして卒業までの1年間に見聞した「現実」は、就職して出会った県外の人に震災後の状況を説明する時に役に立ちました。東北以外では報道が少なくなっているため、だいたいは復興したと思いついて入っている人もおり、私の話に少なからず衝撃を受けていました。こうした情報を伝えられるのも、やはり自分で見聞きした人です。ボランティア活動は、今後も学生の皆さんにとってそうした現実を知る良い機会になると思います。